

地上の星(69)

ゴスペルホール「聖書を読む会」

特別企画(76)

絶望の中に希望の光を灯した宣教師

アイリーン・W・スミス物語



1888年、ウェールズに生まれたアイリーンは、十代のある日、ダブリン市のクリスチャン弁護士の家庭の聖書研究会で、キリストを信じた。その後、法廷弁護士になりたいとの夢の実現のため、勉学に励み、法律事務所での仕事、スラム街の伝道の手伝いでも多忙な日々を送りながら、やがてアル・クイグリーという神学生と将来を約束するまでになった。

このような状況のもと、思いがけなくも、神から海外宣教に召されていることをはっきりと知らされたが、彼女はその自覚を打ち消そうと懸命になった。

「主よ、私は宣教地に行くわけにはいきません。私は弁護士になるための勉強をしていますし、アルと将来を誓い合っています」と祈った。

しかし、かつての平安は失われるばかりである。

とうとう1915年のイースター礼拝で、悔い改め、「主よ。あなたが望まれるところでしたらたとえ地の果てまでも参ります」と主に献身を誓った。

その後、帰国中の日本伝道隊の宣教師たちとの出会いがあり、翌年、早くも日本へと旅立った。2年間の滞在の予定であったはずが、身売りした若い女性たちの救済活動に没頭し、長く日本に留まることとなった。

そして間もなく太平洋戦争が勃発。

敗戦後の日本で自分は何をすべきだろうか、と祈っていた時、米軍のクリスチャン将校が始めた大学生対象の聖書研究会の後継者が見つからないと知り、それを引き継ぐことになった。

すでに還暦を過ぎていたアイリーンであったが、その働きは、巣鴨刑務所に収容されていた戦犯たちにも及び、死刑確定という絶望の中、イエス・キリストによる罪の赦しを知り、希望をもって天に召されていく人々が続々と起こされていった。

今回は、東京お茶の水のクリスチャンセンター設立にも関わり、日本のキリスト教界に多大な貢献をなしたイギリス人女性、アイリーンの信仰の足跡をたどります。

記

1. 日時 : 2018年5月11日(金) 10:30 AM より
2. 場所 : ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師 : 尾崎富雄(ゴスペルホール代表)